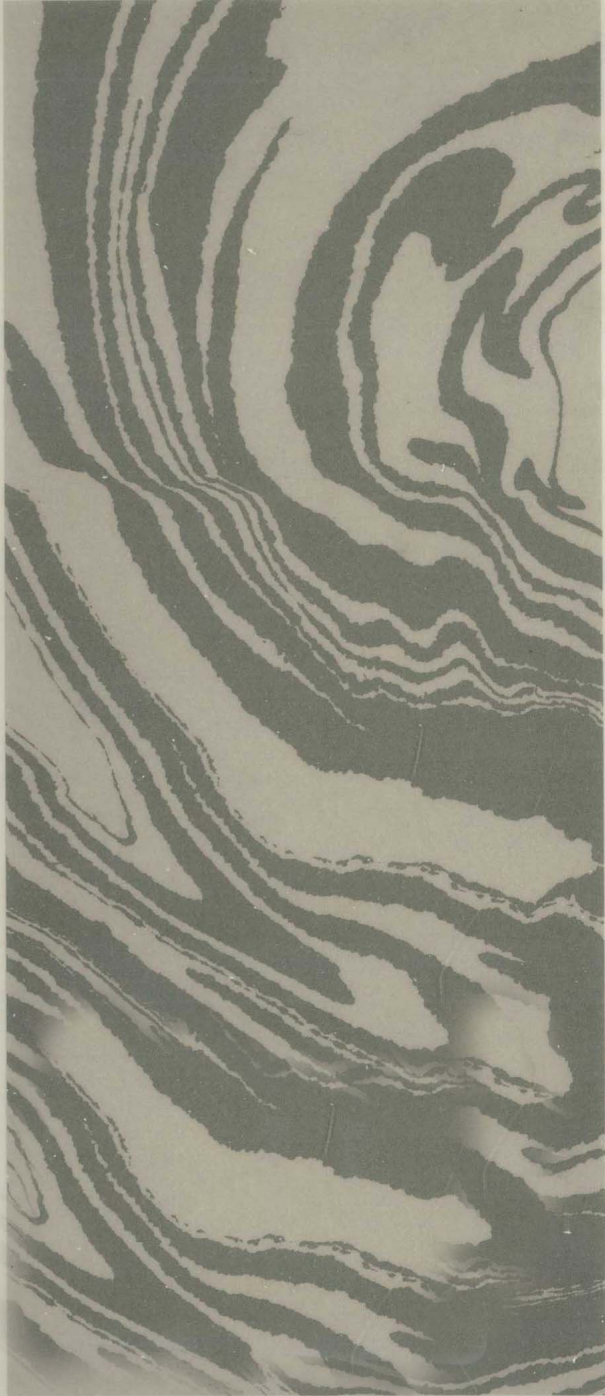


大岡 信

古典を読む

— 21



万葉集

岩波書店

葉集
—
大岡信

岩波書店

大岡 信

1931年静岡県に生まれる

詩人・評論家

『折々のうた』(1~4集、岩波新書)、『紀貫之』
(筑摩書房)、『大岡信詩集』『草府にて』(以上、
思潮社)『大岡信著作集』全15巻(青土社)など

万葉集

1985年4月30日 第1刷発行©

1985年8月30日 第4刷発行

定価 1800 円

著 者	<small>おお</small> 大	<small>おか</small> 岡	<small>まこと</small> 信
発行者	緑	川	亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004471-0

目次

一	『万葉集』を読む前に……………	三
二	時代の背景と『万葉集』……………	一九
三	初期万葉の時代……………	二九
	1 「古代的」ということ……………	29
	2 あかねさす紫野……………	35
	3 むらさきのほへる妹……………	43
	4 「人妻」の論……………	50
5	その他の秀歌……………	59

四 近江朝の唐風文化と壬申の乱 …………… 六

- 1 やまとうたと漢詩の遭遇 67
- 2 壬申の乱あとさき 72
- 3 「おほぎみ」讚美の背景 80

五 皇子・皇女の歌 …………… 七

- 1 大津皇子の歌 87
- 2 大伯皇女の歌 100
- 3 志貴皇子の歌 104
- 4 但馬皇女と穗積皇子の歌 107

六 柿本人麻呂 …………… 一五

- 1 人麻呂像結びがたし 115
- 2 人麻呂——相聞の世界 127
- 3 人麻呂——挽歌の世界 143
- 4 人麻呂——旅のうた、そして枕詞 170

七 柿本人麻呂歌集秀逸 一九二

- 1 「正述心緒」の歌の力 191
- 2 「寄物陳思」の歌の豊かな意味 206
- 3 相聞歌から誹諧歌へ 214

八 人麻呂以後の歌人たち 三三

- 1 憶良と「老」の歌の意味 221
- 2 大伴一族の文学的達成の意味 234
- 3 梅花の宴の論 241
- 4 貧窮問答の論 252

あとがき 二六五

万
葉
集

一 『万葉集』を読む前に

「なぜ『万葉集』が大事なんですか」とだれかに問われたとする。私は「そりゃ、何たって面白いからです」と即座に答えるだろう。答えたあとで、「ではどこが面白いんです」と問われれば、一息ついて、「いろいろ」と答えるだろう。

『万葉集』を多くの日本人が尊び、くりかえし読みつづけてきたのは、実際、この古代詞華集が、いろいろの意味でとにかく面白い、という力強い実感があつてのことであつて、そこにはあまり理屈はない。『古今集』や『新古今集』、『玉葉集』や『風雅集』、また『和漢朗詠集』や『芭蕉七部集』を面白いという場合には、多少なりともその理由を同時に明らかにしながらいう必要があるだろう。『武玉川』むたまがわの方が『柳多留』やなぎだるよりも面白いよ、などという議論を始めようものなら、江戸期の前句付まへくづけの大流行や、いわゆる雑俳的な分野に

ついでのある程度の知識の前提なしには、ツウといえればカアという具合の議論を实らせることは難かしい。

『万葉集』には、そういう途中経過なしに直じかに入っていきける、というのが、少しでも『万葉集』の歌を読んで好きになった人なら、たぶんだれでもが持っている一つの勘であろう。

この勘は正しいか否か。それを議論しはじめると、事は到底簡単にはおさまらなくなる。万葉学を深く掘り下げてゆこうとする研究者なら、一層のこと、『万葉集』四千五百余首の背後にひそむ謎のかずかずを念頭に思い浮かべ、途中経過の茫洋たるひろがりをもって、氣むずかしく頭を横に振るかもしれない。『万葉集』全二十巻とひとことであるが、この二十巻が近代の詞華集のように、特定の編纂者によって特定の時期に一挙にまとめられるような性質のものではなく、いわば巻一および巻二を中核の原型として、順次家を建て増しするようにに増補されて成った複合歌集であることは、万葉研究史における常識である。この万葉成立史の研究は、古く江戸前期の契沖の名著『万葉代匠記』によって先鞭をつけられた。彼のとなえた万葉二度撰説(天平十六、七年(七四四、七四五)ころに巻一から巻十六までが撰ばれ、天平宝字三年(七五九)に巻十七から巻二十までが撰ばれたとする)を基礎

として、爾來現代にいたるまで、万葉研究の最重要部分をなすといってもいいほどに精密な論考が重ねられてきたのが、万葉成立史論の分野だったのである。たとえば柿本人麻呂の生歿年をめぐる議論のようなものも、当然この領域の中に包含され、それ一つだけでも多くの研究者また読者を熱狂にまきこむことのできる謎を秘めている。そういう観点からするなら、『万葉集』は『古今集』などにくらべても、はるかに複雑な組織体であることは明らかなのである。

私は以下の文章で、『万葉集』のそのような側面に深く立ち入ることはしないだろう。必至やむを得ない場合には、すぐれた研究者の学恩におんぶして、そのような領域に歩み入らねばならないことは当然だが、限られた紙数で『万葉集』の歌の美質を力の限り説き明かそうというのが第一の目的である本書においては、私はともかく万葉の歌そのものにとえず肌身で接している位置に自分をおこうと思う。またそれが、私のように万葉を愛することにおいては大いに自負と自信をもちながらも、これを少しでも深く研究したことがあるとは到底いえない立場の物書きにとって、とるべき唯一の道であることは明白である。しかし、たった今私が書いたこと、すなわち『万葉集』は増築に次ぐ増築を経て現在の形になったというのが学者にとっては常識である、という事実にさえ、「えッ」と驚く人

の数は多いだろう。無数といってもいいだろう。まして、『万葉集』はその成立の過程で、「十五巻本」としてすでに立派な体裁を整えていた時期があり、さらにそれが「二十巻本」にまで膨らんで一層豊かな現行の形をとったのだ、というような説については、まったく初耳である人がほとんどではないだろうか。

そしてまた、これら「十五巻本万葉集」や「二十巻本万葉集」が成立してくる上で、古くは舒明天皇の皇統、より現実的には天武天皇の皇統の繁栄を祈念する天武系の女帝たち、すなわち持統(天武皇后)、元明(持統の異母妹で、天武・持統の皇子草壁の妃)、元正(元明の娘)という三人の女帝たちの熱意と執念が大いに働いていたと考えられる、というような説を聞けば、ほとんど歴史推理小説を読むような感興をいだかされるかもしれない。

いずれにせよ、『万葉集』は成立史論だけでもなお多くの未知の発見を予想させるものを秘めた一大山塊なのである。今日、しかるべき国文学研究専門誌が、年に一度や二度は万葉研究論文で誌面を埋めるのが恒例のようにになっているのも、そういう背景からすれば不思議ではない。

しかし、誌面が賑わえば賑わうほど、研究は細分化し、主題は専門化し、一般の読者にはおいそれと近づくことが難かしいものになっていかざるを得ないという矛盾も生じる。

「なぜ万葉が大事なんですか」と問われたなら、「そりゃ、何たって面白いからです」とまずもって答える立場を守ろうと私が思うのは、そういう未分化な感覚的・感性的反応が、何といつてもすべての知的探究の出発点になければならないからであり、『万葉集』についてはとりわけ大切だと思ふからである。

右にごく一端だけ触れた万葉成立史の諸問題は、もちろん現在ただいま、万葉学者たちによって多様な角度から追求されているもので、その全容を知ることにはまず不可能に近い。しかし大筋を知るには、古代文学史のしかるべき箇所をひもとくだけでも足りるだろう。たとえば『日本文学全史』(学燈社)の第一巻上代編には、十数人の専門学者による古代文学論や『万葉集』論が文学史の形をとって並んでいて、その第六章「万葉集の成立と構造」(執筆伊藤博)を読めば、『万葉集』の複雑な成りたちについて、あらためて目を開かれる人も多いにちがいない。

さて、私はもう一つ、『万葉集』に関して常識として知っていなければならないのに、案外私たちが忘れてしている事柄についてふれておきたい。それは『万葉集』の原文の大部分が、現在私たちの読んでいるような漢字・仮名まじりの表記で書かれたものではなく、

「万葉仮名」とよばれるところの、実体は漢字そのものである文字表記によって書かれていたという事実である。漢字本来の意味を生かして用いるのではなく（そういう例外的な場合も無いことは無かったが）、主としてその字音によって用いたので、結果的には仮名文字と同じような役割りをはたしたから、そこで「万葉仮名」とよばれたにすぎない。

『万葉集』がもともと漢字ばかりで書かれ、しかもその用いられ方がきわめて特殊だったということとは、当然それを読み解くのに後世が大いに苦心しなければならなかったことを意味する。万葉が成立してわずか百数十年後の時代に生きていた平安朝の大歌人たち、たとえば紀貫之などが、『万葉集』の数多くの歌をどのように読んでいたか、またそもそも、どれほどの数の万葉歌を実際に眼にし得ていたか、正確に知ろうとしてもまずは絶望的なことであろう。

紀貫之らが撰進した最初の勅撰和歌集『古今集』は延喜五年（九〇五）に醍醐天皇により下令されたか、または完成して奏覧に供されたかしたものだ、それから約半世紀後の村上天皇天曆五年（九五二）、第二の勅撰和歌集である『後撰集』の作業が始められた。五人の撰者の中には、清原元輔や源順と並んで、紀貫之の息子の時文も加わっていたが、後宮の昭陽舎、通称「梨壺」で行われた作業は、勅撰の和歌集をえらぶことと同時に、何

よりもまず、『万葉集』に訓点をほどこす作業だったのである。

言いかえれば、『万葉集』が生まれてから一世紀の後、これはすでに世にも難解な古歌を集めた本になりはてていたらしい。以後、『万葉集』は久しい間、ごく少数の恵まれた立場にある人々が手にしうる以外には、名のみ高くして実際には手の届きかねる本となり、江戸時代にまでいたった。その間、和歌の本といえば、何といつても『古今集』が、そのみごとに規範性、編纂意図の明確さ、そして何よりもまず「勅撰」の後光をまとつて、世に君臨したのである。

万葉仮名を話題にするとき、私の胸にまず湧きあがるのは、われわれの過去というものが未来とほとんど同じほどに「未知」の世界を豊かにもっているということ、しかもその世界をのぞきこむことは、未来を単に望み見る場合とは違って、しばしば感動的な発見をもたらすということへの畏敬の念である。

第一、万葉仮名を使って書いた古代知識人たちは、何というたくさんの漢字を識っていたことだろう。彼らは彼らなりのやり方で、字引きを作っていたのだろうか。字音だの字訓だの入り乱れる表記法を、彼らはどのようににして、後世が三十一文字の歌の形に読み解くことができるほど、とにもかくにも法的に組織して使用することができたのだろうか

か。何と辛抱づよく、また頭のいい連中だったことだろう。それはまた、七世紀・八世紀の大和にまで及んでいた中国・朝鮮文明の影響の大きさ、広がりを示すに十分な歴史的事象でもあったのである。『万葉集』を単に素朴で単純一途で原始的な強さと純粹さにみちたものとのみ見る観点に立つだけでは、中国、朝鮮、さらには遠くインド文明の広がりの中に『万葉集』を置いて見るというような視野をもつのは難かしくなる。しかし私たちは、たとえば柿本人麻呂がどれほど深く中国文明から流れ出た波の中に身を浸していたかについて、彼自身の直接の証言の有無にかかわらず、いつも頭の片隅においておかねばならないのである。

さて、万葉仮名を現在私たちが読んでいるような漢字仮名まじり、五七五七七の整然たる和歌として再生させるには、いうまでもなく多くのずば抜けた明晰さと直観力をもった学者たちによる何世紀もの解読の歴史が介在しなければならなかった。もちろんそのことを知らずに『万葉集』を享受しても格別とがめられる筋合いのものではないが、しかし知っていた方がいいことはたしかである。なぜなら、今私たちにすらすら読めるようになって『万葉集』の本文は、実際には、平安朝以来の歌人・学者たち、特に江戸前期の古典学者僧契沖や、中期・後期の国学者賀茂真淵、本居宣長をはじめとする多くの学者たち

が、力をあわせて創造してきたものといっている一面を持っているからである。
その一例をあげてみよう。

標結しめゆひてわが定めてし住吉すみのえの浜の小松は後のちもわが松 卷三・三九四

卷三の「譬諭歌」の章にある余明軍よのみやうぐん（金明軍とする本もある）の歌。「しめなわを結わえて、この中は私のものと定めておいたこの住吉の浜辺の愛らしい小松は、いついつまでも私のもの」というので、小松は若い娘の譬諭である。住吉の浜に住む娘と契りを結んだ男が、心変わりせずにおまえを愛しつづけると誓っている歌である。

訓読に従って読めば何の困難もない。しかし万葉仮名の原文はどうだろうか。

印結而 我定義之 住吉乃 浜乃小松者 後毛吾松

第二句の「義之」がなゼテシと訓読できるのか。現代の注釈書はすべて簡明にその理由を教えてくれる。